

山口県立山口博物館所蔵絵図資料ガイド

山 田 稔

Guide to old maps from the Yamaguchi Prefectural Museum

Minoru YAMADA

山口県立山口博物館研究報告

第51号(2025年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.51 (March 2025)

山口県立山口博物館所蔵絵図資料ガイド

山 田 稔¹⁾

Guide to old maps from the Yamaguchi Prefectural Museum

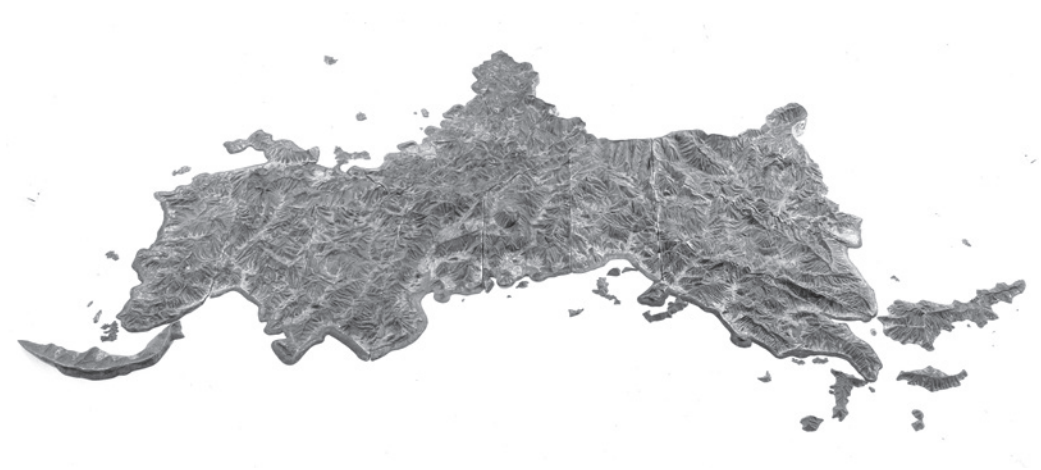
Minoru YAMADA

本稿は、山口県立山口博物館が所蔵するおよそ70点の絵図資料のうち、利用頻度や資料的価値の高い14点を選び、図版と解説を掲載したものである。

館蔵の絵図資料は、当館の前身である防長教育博物館(明治45年設立)以来の収集作業で蓄積されたものである。全体を見ると、特定コレクションとしてまとめたものではなく、山口県立教育博物館(大正6年設立)時代の模写が多い。

一方、特筆すべき資料に「防長土図」がある。明和4年(1767)、萩藩郡方地理図師有馬喜惣太が作製した防長両国の巨大な地形模型で、国の重要文化財に指定されている。維新後に山口県庁へ引き継がれたのち、山口県立教育博物館の収蔵となり、現在に至っている。この他、数は少ないが、萩藩絵図方作製の「御両国明細地図」(本稿目録No.9)が含まれている点も注目される。

なお、本稿掲載絵図の一部は、県立山口博物館ウェブサイトサイト内の「バーチャル収蔵庫」および「高画質画像資料ダウンロード」で画像閲覧が可能である。



防長土図

1) 山口県立山口博物館(歴史)

目 次

No	資料名	作製者	年代	頁数
1	安芸吉田郡山城古図		江戸時代前期	1
2	安芸郡山城古図		江戸時代中期頃	1
3	行程記 登り一・二 (写)		江戸時代、明和元年(1764)以降	2
4	御国廻御行程記 (抄写)	山口県立教育博物館	昭和11年(1936)	1
5	防長土図	有馬喜惣太	明和4年(1767)4月	109
6	従大坂至三田尻海上絵図		寛政13年(1801)2月	1
7	宮洲塩田図		文化年間(1804~1818)頃	1
8	文政時代山口古図		江戸時代後期	1
9	御両国明細絵図		(天保12年(1841))	1
10	萩城下町絵図		幕末期、嘉永2年(1849)以降	1
11	山口御屋形図 其一・其二 (写)		幕末期	2
12	佐波郡三田尻宰判地面之図	細田直行	慶応4年(1868)	1
13	山口古図 (写)	山口県立教育博物館	大正6年(1917)7月	1
14	長藩移鎮当時山口地図	山口県立教育博物館	大正6年(1917)	1

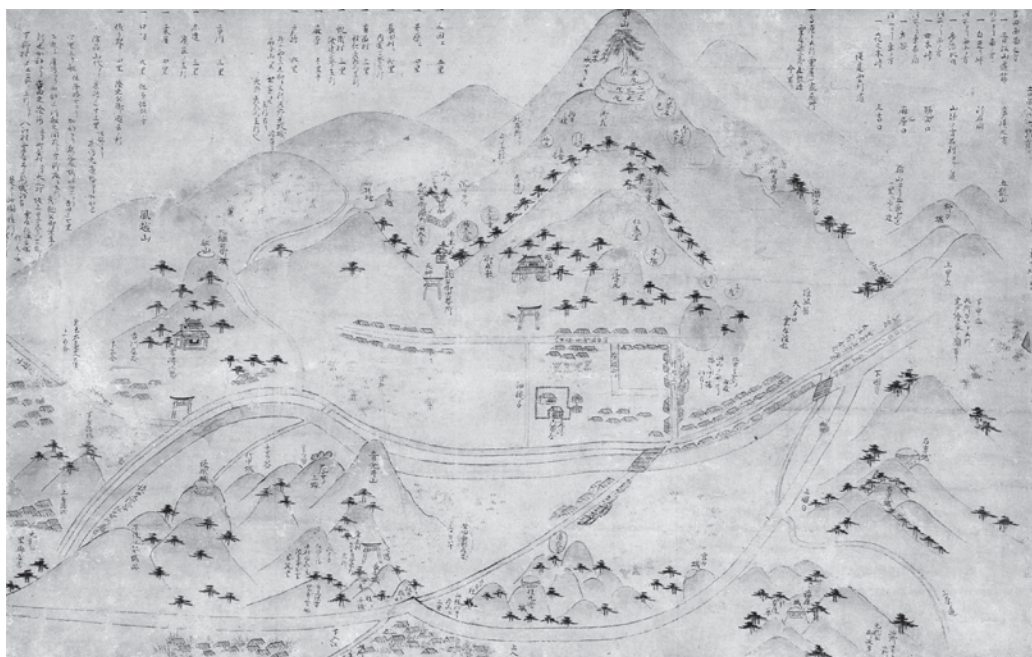
凡 例

一、記載項目は、資料名/筆者・作製者/年代/品質・形状/頁数/法量/整理番号/解説、の順である。

一、法量は、原則として本紙・本体のもので、軸装などの全体は（ ）で表示した。

一、法量の単位は、センチメートルである。

一、No.2 と No.5 は、県立山口博物館ウェブサイトサイト内の「バーチャル収蔵庫」および「高画質画像資料ダウンロード」で画像閲覧が可能。



元就公御廟所周辺拡大

1 安芸吉田郡山城古図

江戸時代前期

紙本墨画淡彩

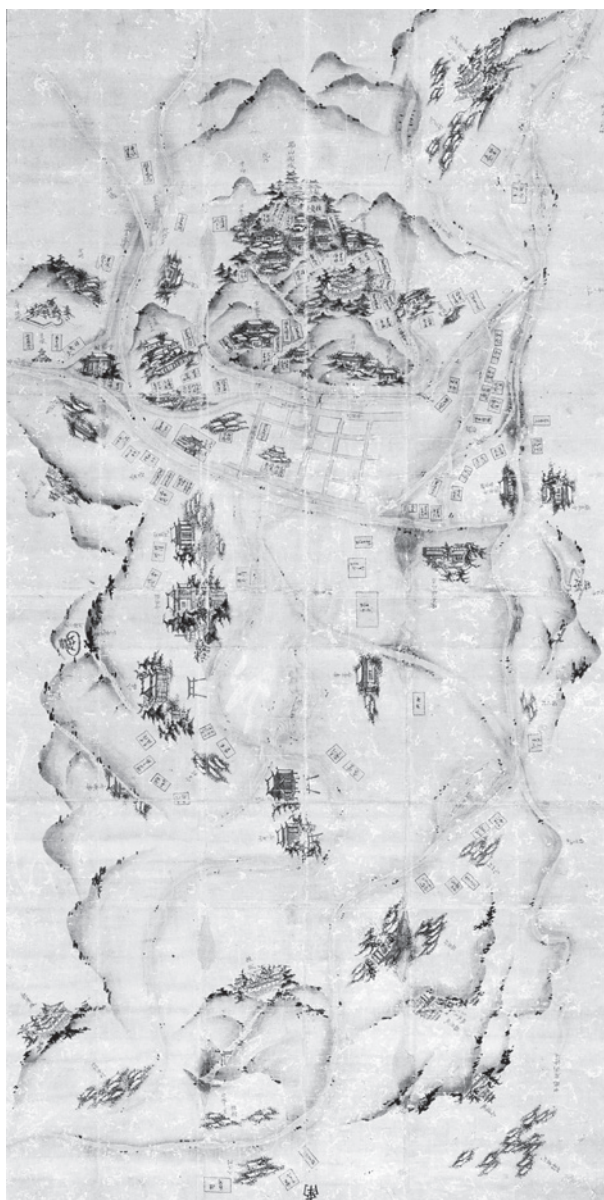
1 幅

55.5×87.8(126.3×107.0) 540-1

郡山城は、建武3年(1336)、大江広元の曾孫毛利時親が小規模なものを築城したと伝え、その後、毛利元就が大改修を行って城郭規模を全山まで拡大し、天正19年(1591)元就の孫・毛利輝元が広島に移るまで毛利氏の居城であった。

本図は、すでに廃城となった郡山城を城跡として南西方向から描いた絵図。郡山城跡と城下町を中心として、周辺の毛利家重臣たちの居城、関係史跡などを横長の構図に配置している。上部には、吉田への入り口や各地への里程が記されている。景観年代は、「広島御茶屋」が描かれていることから、貞享3年(1686)～正徳年間(1711～16)頃とみられる。

なお、郡山城絵図は複数あり、詳細は『描かれた郡山城展－絵図にみる戦国の城と城下町－』図録(吉田町歴史民俗資料館、1993)を参照。



郡山城周辺拡大

2 安芸郡山城古図

江戸時代中期頃

紙本墨画淡彩

1 幅

155.0×79.0(221.5×103.2) 540-2

毛利氏が城時代の郡山城を追想的に描いた絵図。南西方向からみた、毛利氏の居城郡山城と城下町ならびに周辺の村々や桂城・福原城など毛利家重臣たちの居城、家臣たちの屋敷地、常栄寺などの関連寺院を縦長の構図内に配置している。記載内容からみて、元就・隆元・輝元の毛利氏三代の功業とそれを支えた家臣団の配置を意識したものとみられる。詳細は秋山伸隆「郡山城絵図の基礎的考察」(『描かれた郡山城展－絵図にみる戦国の城と城下町－』図録、吉田町歴史民俗資料館、1993)を参照。



行程記 登り一 巻首（萩・唐樋札場～橋本川周辺）



行程記 登り二 巻首（防府・三田尻御茶屋周辺）

3 行程記 登り一・二（写）

江戸時代、明和元年(1764)以降

紙本着色 縮尺7,800分の1

2帖

(表紙)28.3×13.8 個人蔵(県立山口博物館寄託)

「行程記」は、萩藩絵図方が作製した街道絵図(道中図)である。萩～江戸(品川)間を描いた「行程記」全23帖(毛利家文庫、山口県文書館蔵)を中心に、控本や写本など計57帖(近代以降の模写を除く)が現存する。

本図は、萩・唐樋札場から防府・三田尻までの萩往還(登り一)と、三田尻から安芸国(広島県)との国境・小瀬川までの山陽道(登り二)の写本である。

「行程記」の詳細は、山田稔「近世街道絵図「行程記」の路線図について」(『山口県文書館研究紀要』第36号、2009)を参照。

4 御国廻御行程記（抄写）

山口県立教育博物館

昭和11年(1936)(底本・寛保2年(1742)9月)

紙本着色 縮尺5,600分の1

2帖

(表紙)26.4×24.3 540-27

寛保2年(1742)9月、6代藩主毛利宗広の「御国廻り」に使用する街道絵図(道中図)として、絵図方役人井上武兵衛・平田仁左衛門、同絵書有馬喜惣太(のち郡方地理図師)、同筆者岩崎四郎兵衛が現地踏査を行って下図を作製し、雲谷派絵師松田等叔と絵図方介筆役野田平右衛門(右筆役)が至極美麗に清書したもの(全7巻、毛利家文庫・地誌57、山口県文書館蔵)。下図は、維新後に萩町立明倫図書館へ移管され、現在は萩博物館(第1～6巻)と長門市・人丸神社(第7巻)に所蔵されている。

当館所蔵の2帖は、県立教育博物館時代に明倫図書館所蔵本を抄写したものである。抄写部分は、「凡例」「岩国城下周辺」「都濃郡末武村～佐波郡大崎村」の3カ所で、前2カ所は本来、別位置であるが、画面上では恰も連続しているかに見えるため注意が必要である。また、抄写時の標題は、明倫図書館の標題「行程記」に拠っているが、ここでは内容に合わせて「御国廻御行程記」(抄写)としている。

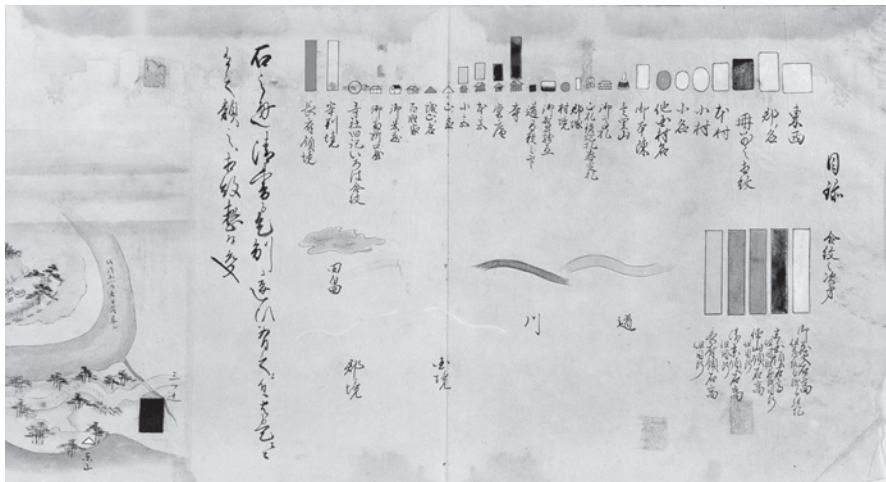
「御国廻り」は、萩藩主が代替わり後に初めて行う領内巡見である。そのルートは、萩城下を出発し、石州街道を北上して石見国境の野坂に至り、山代街道、岩国往來を南下して岩国に出て、山陽道を西進して赤間関に至り、響灘・日本海に沿って赤間関街道(北浦道筋。一部寄り道)を北上して萩に帰着するもので、防長のほぼ外縁を時計回りに一周するおよそ120里の行程であった。

底本の「御国廻御行程記」は、紙本着色、折本装の全7帖で構成され、縮尺は、5,600分の1。街道を画面の中心に配置し、進行方向にしたがって右から左へスクロールする方式で、景観描写の視点は、常に進行方向の左上空に置かれている。

方位は、東西南北の文字を記した正方形の枠を、画面の進行に合わせて角度を変えることによって表示する。地名は、長方形や小判型の枠内に、郡、宰判、支藩領、本村のほか小村、小名レベルまで細かく記されており、難読のものには振り仮名が付けられている。さらに村名の側には、村高・家数が記されるなど基本情報に事欠かない。街道沿線の人家をはじめとした建物が細かく描かれており、なかでも藩関係の御茶屋、勘場など特殊なものは外観を誇張気味にしている。

また、一里山、番所、蔵、駕籠建場、高札場などの施設と一部の人家は、半記号化した印判で表示している。ただし、人家の数はある程度の集まりを示した場合が多く、厳密ではない。寺社名には、必ず宗派が示されるほか、愛宕社、毘沙門堂などの小堂・小祠に至るまで丁寧に記される。山名は、大小を問わず、山頂部分に置かれた三角型の枠内に示される。名所旧跡の由来書は、小紙片に細字で書かれており、朱色の引き出し線を使用して読みやすく配置される。橋や渡し場の情報も詳しく、「土橋」「石橋」など種別が示され、急坂の場合は道の途中で横線を描き入れている。図中の○囲い文字は、別冊の寺社由来書である「寺社旧記」(7巻、毛利家文庫、山口県文書館蔵)との合紋である。

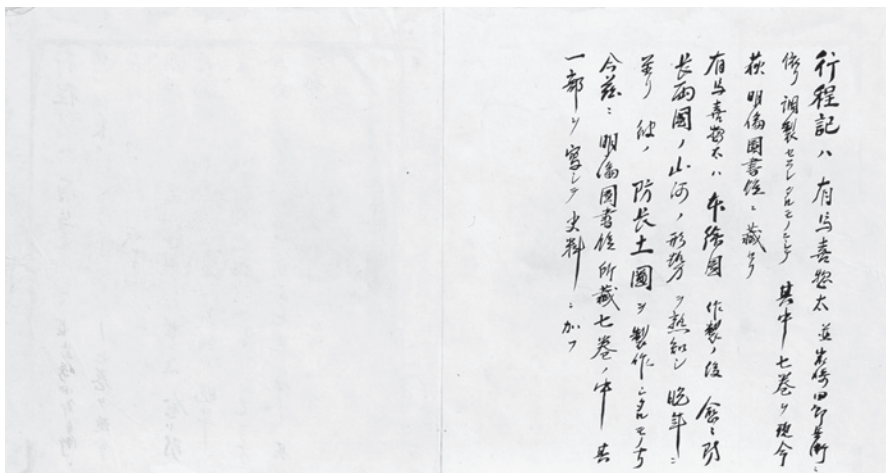
ちなみに、「御国廻御行程記」は御国廻り出発の1年前から準備に取り掛かったようで、絵図方の井上・平田・有馬・岩崎らが現地調査のため度々出張している。図中の文字書き込みは右筆役の野田平右衛門が、別冊の「寺社旧記」は粟屋市左衛門、山県半兵衛が担当した。肝心の図は雲谷派絵師・松田等叔景明が昼夜御蔵本に詰めて作製し、何とか出発までに完成したようである。本番の御国廻りの際には、藩主の駕籠の側に井上と平田が交代で詰めて諸所での質問等に対応しており、本図と寺社旧記を携行していたとみて間違いはない。



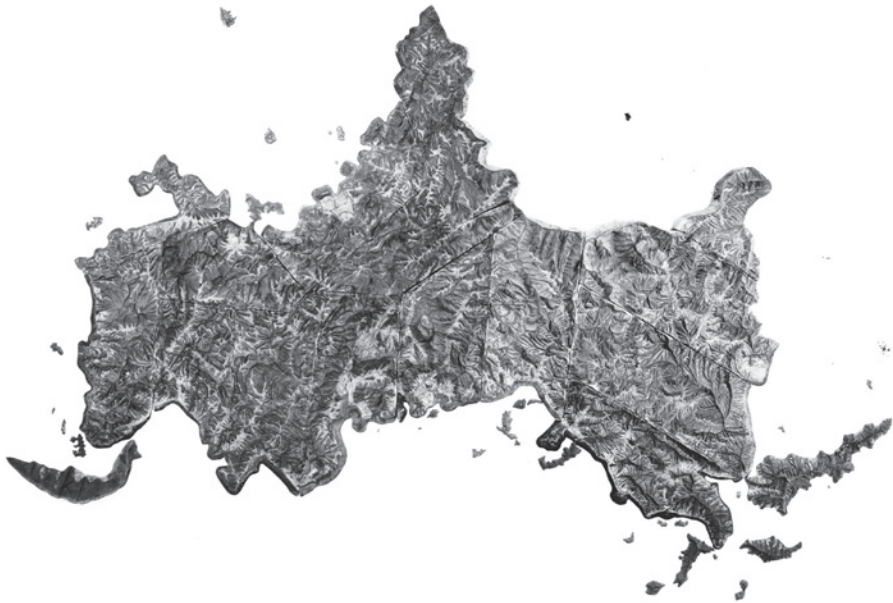
其一 巻首・凡例部分



其二 防府・宮市部分



其二 巻尾・識語部分



5 防長土図

重要文化財

有馬喜惣太

明和4年(1767)4月

縮尺／約25,920分の1、垂直倍率／約5倍

109個(本土17切、島92個) 附長持3棹、櫃1合

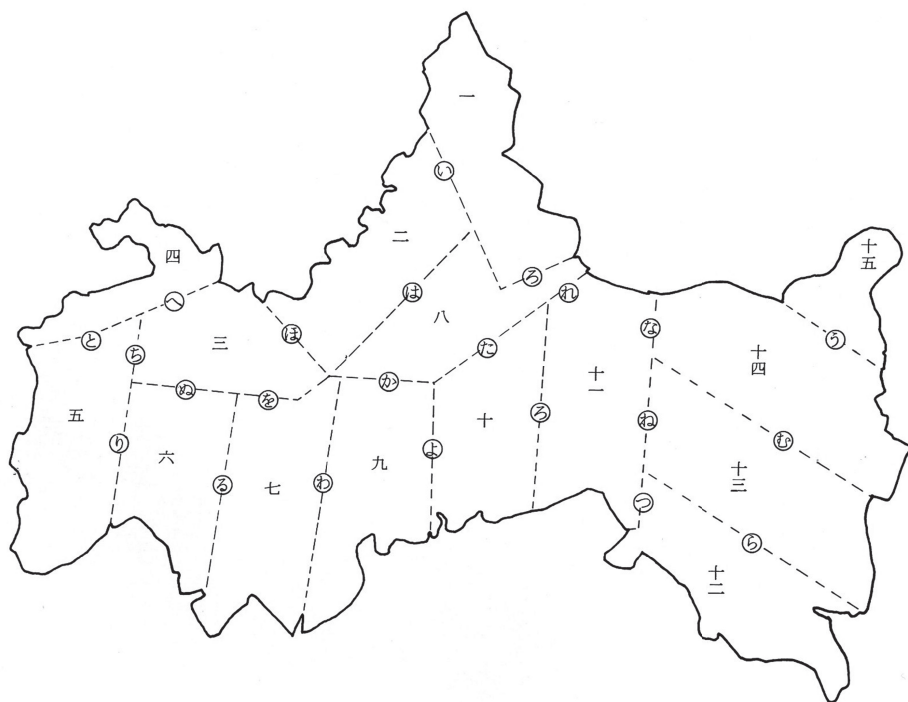
(全体組立時)東西約5,600×南北約3,800 540・29

防長土図は、萩藩郡方地理図師有馬喜惣太(1708～69)が藩命で製作した周防・長門国の大型地形模型である。

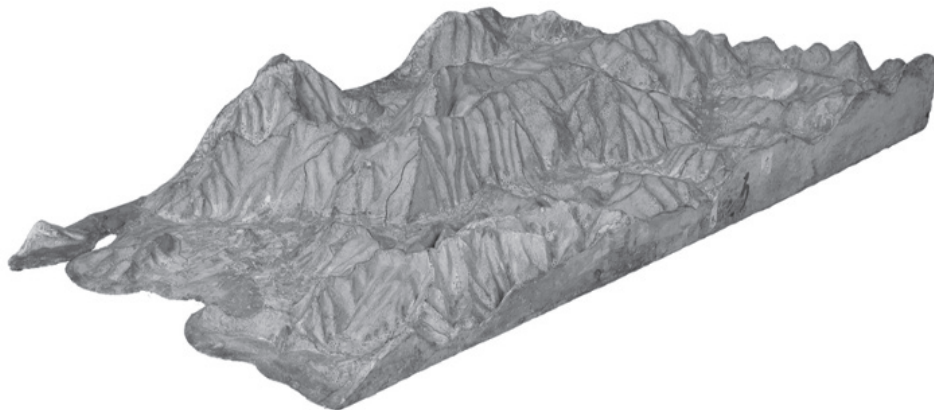
防長両国の本土を分割した「切(きり)」と称される主要部品17個と周辺の島々92個の合計109個で構成される。製作方法は、まず地形を土型で作り、その上に和紙を何枚も張り重ね、各切と大型の島は土型を除いて張り抜きとし、小型の島々は土型を残している。山地、平野部、耕地、海、砂地が色分けされ、国境・村境を黒線、宰判境を白線、水系を濃青色、道を朱線で表している。集落、寺社、一里山、役所等の施設は黒または朱の記号で記入し、地名や寺社名等は貼紙で示している。

本図は、領国を鳥瞰した立体の国絵図ともいえるべきもので、他に類例を見ない。また、防長の地理に精通し、その自然・人文情報を小縮尺の立体図の中に適切に表現した有馬の技量は高く、わが国地図発達史上特筆される資料である。

詳細は、山田稔「有馬喜惣太製作「防長土図」について」(『山口県立山口博物館研究報告』第16号、1990)を参照。なお、県立山口博物館ウェブサイト内の「バーチャル収蔵庫」で、各切の高画質画像並びに3D画像が公開されている。



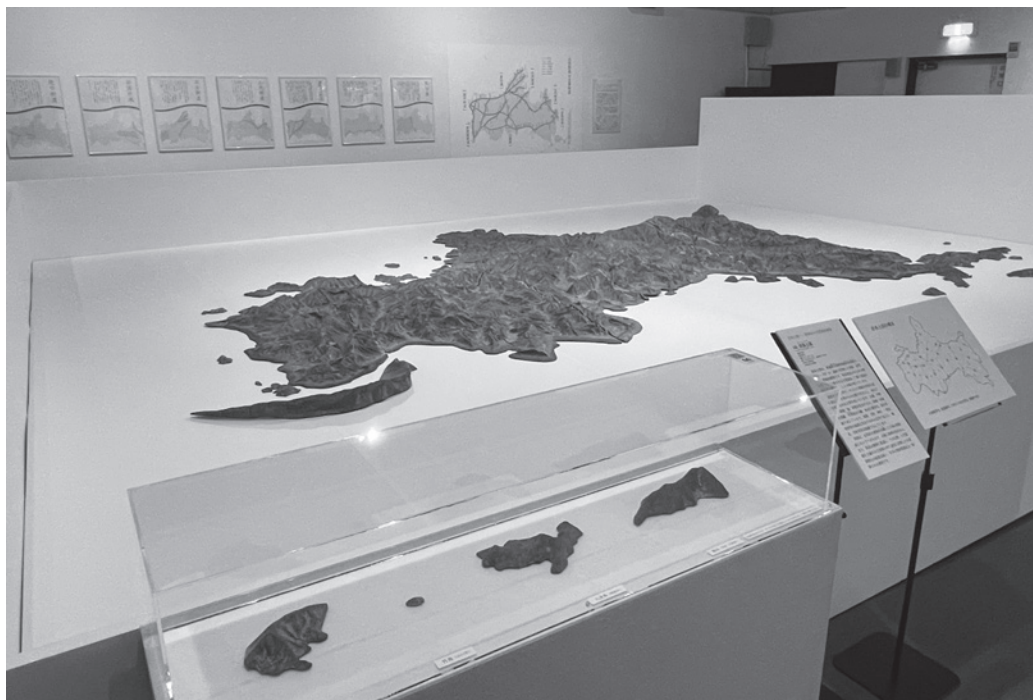
防長土図接合図（漢数字は切番号、○文字は合紋）



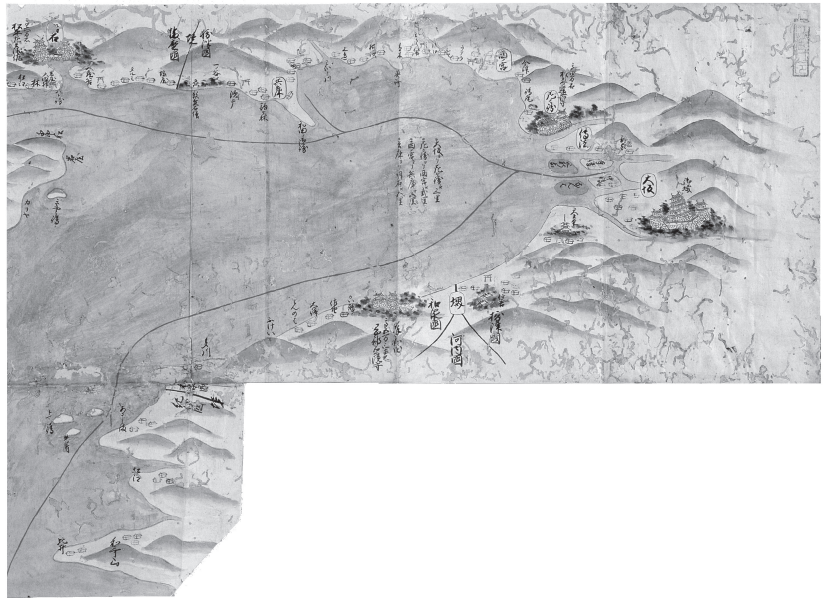
十の切（三田尻・小郡・山口・都濃・徳地宰判）



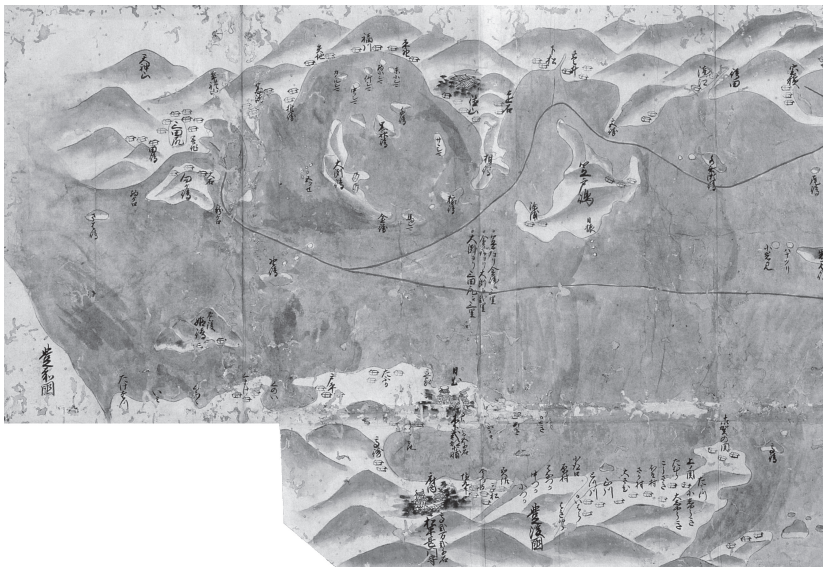
十一の切（徳山・富田周辺）



防長土図展示風景（特別展「江戸時代の旅と街道」、県立山口博物館、2021）



巻首 大坂周辺



巻尾 三田尻周辺

6 従大坂至三田尻海上絵図

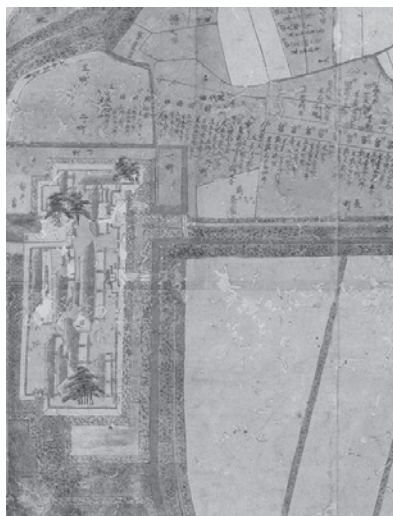
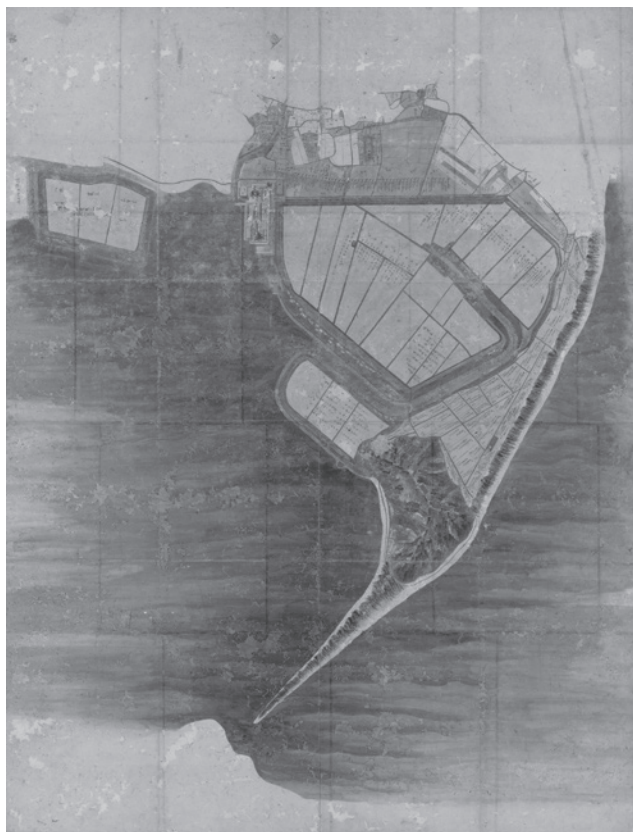
寛政13年(1801)2月

紙本着色

1帖

(表紙)27.5×16.0 540-33

防府三田尻から大坂までの瀬戸内航路を描いたもの。描写範囲は豊前・豊後・周防・安芸・備後・備中・備前・播磨・摂津・河内・和泉・紀伊。伊予・讃岐・阿波国に及び、各藩主名と居城、石高が記されている。内容から見て、長州藩主の参勤交代時の航路を描いたものとみられる。裏表紙に「寛政十三年辛酉二月写之 内藤氏蔵」の墨書があり、巻首に関防印「内藤氏印」がある。



覧海軒周辺拡大



覧海軒図

7 宮洲塩田図

文化年間(1804~1818)頃

紙本着色

187.0×143.0 540-65

宮洲は、都濃郡豊井村(現・下松市)のうち、瀬戸内海へ向かって砂州が伸びた一帯で、対岸に笠戸島が位置する風光明媚な地である。江戸中期には、大規模な塩田開発が行われ、開発と経営を手掛けた宮洲屋(磯部家)は、当時、全国長者番付に周防国で唯一載った豪商であった。

本図は、その宮洲一帯を描いたもので、磯部家の所有する塩田と田畠の区画毎の面積と石高が記され、同家の別邸「覧海軒」も見える。「覧海軒図」(当館蔵)には、二階から海や塩田を眺める人々や、塩田で塩づくりに従事する人々などの姿が克明に描かれている。

本図の詳細は、小山良昌「新収蔵資料紹介『旧豊井村磯部家資料』」(『山口県立山口博物館研究報告』第17号、1991)を参照。また、「下松市郷土資料・文化遺産デジタルアーカイブ」で高画質画像データが公開されている。



山口御茶屋周辺拡大

8 文政時代山口古図

江戸時代後期

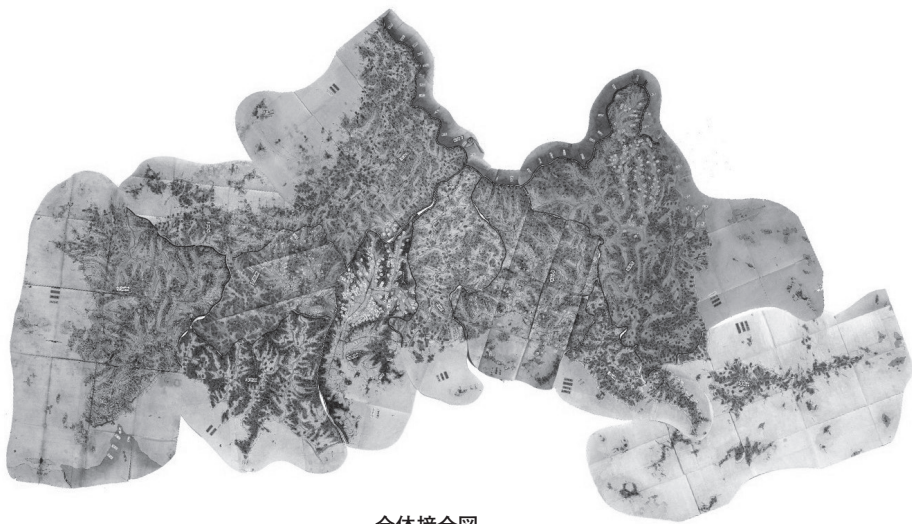
紙本着色

1 幅

82.5×115.5(123.5×125.0) 540-4

山口盆地内の藩施設と寺社、町名、小路名などを記したもの。東は木戸山峠や恋路村周辺から西は吉敷毛利家屋敷周辺まで。北は萩往還の一の坂周辺から南は陶埴や勝坂埴までを含んでいる。

外題箋に「文政時代山口古図」とあるが、製作年・作者の記入はない。文久3年(1863)以降、萩からの藩庁移転に伴い新たな政治拠点となった山口御屋形、山口明倫館などの藩施設は描かれておらず、文政時代の確証はないが、その頃の山口の様子を描いた図とみてよい。



全体接合図



阿武郡



吉敷郡 山口部分拡大

9 御両国明細絵図

(天保12年(1841))

紙本着色

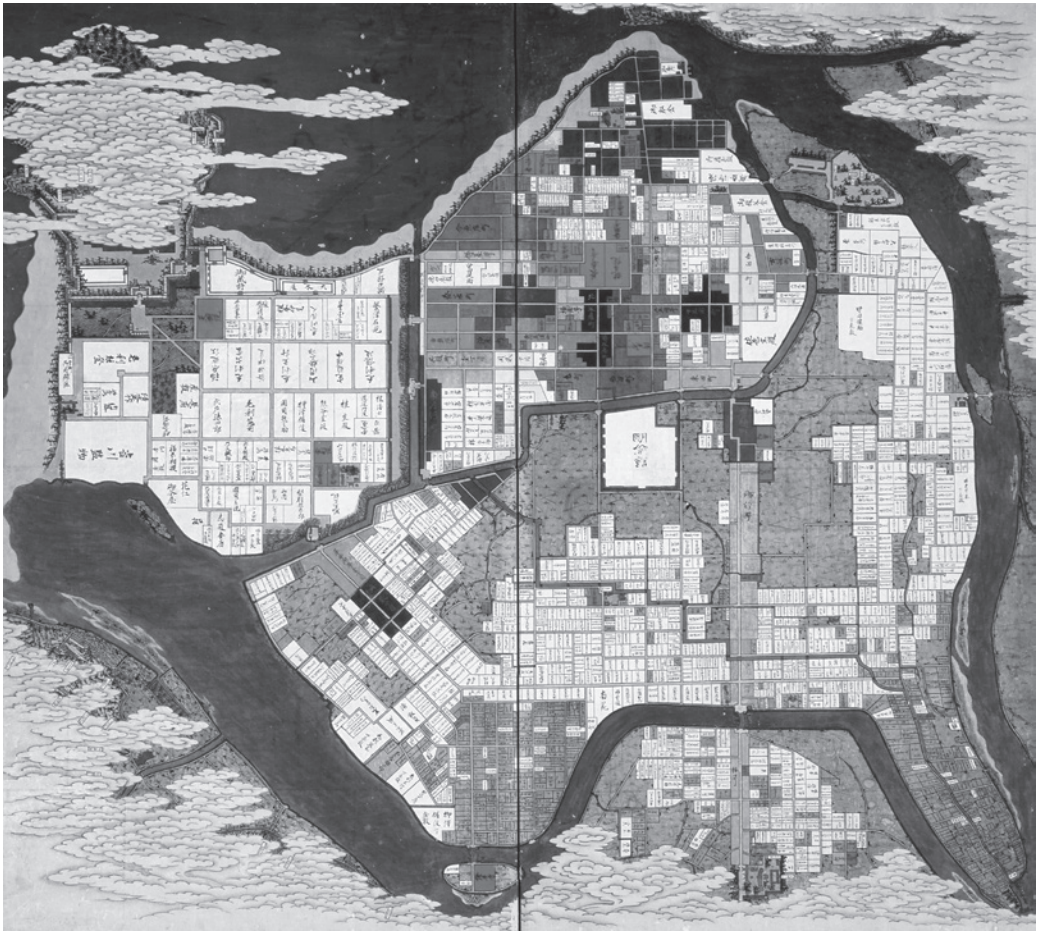
11枚 袋共

540-24

郡境で切り抜かれた不定型の防長12郡図(全11枚。阿武郡・見島郡で1枚)で構成され、接続すると1枚の防長全図となる仕様である。国境は黒の二重線、郡境は黒の一重線、村境は白の破線で示される。郡名・村名・小字名が四角あるいは小判型の枠内に記され、村名以下は宰判・支藩領別に色分けされる。描写範囲は、筑前・豊前・安芸・石見国境周辺までで、各々隣接する他国の村名が記されている。街道は朱線で、町や集落の集まりは黒丸で示されている。また、一里塚が集落よりもやや大きめの黒丸で街道の両脇に示されている。ちなみに、実際の防長の一里塚は街道の片方に置かれていた。

作製者は様式等からみて萩藩絵図方であり、「防長両国郡別絵図(写)」(袋入絵図20～27、山口県文書館蔵)の原本とみられる。

※図版の「全体接合図」は合成写真。



10 萩城下町絵図

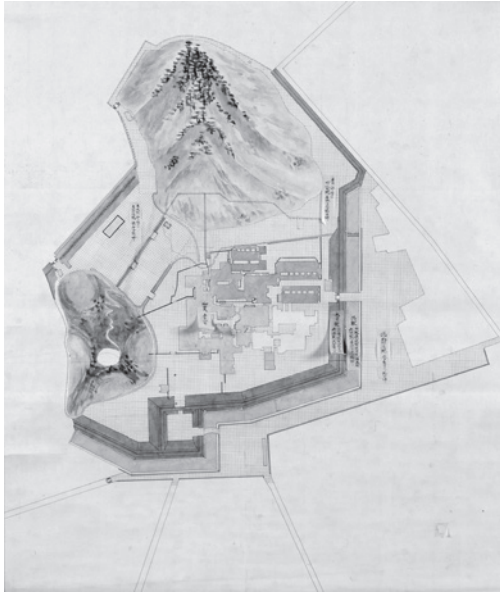
幕末期、嘉永2年(1849)以降

紙本着色

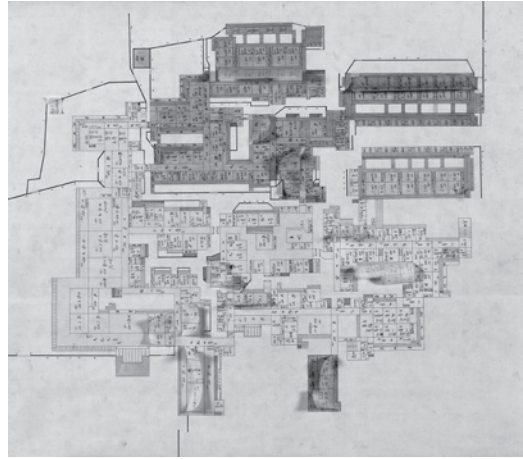
2曲1隻

157.5×173.0 540-28

長州藩の城下町萩は、阿武川の分流、松本川と橋本川に囲まれた三角州上に位置する。図の左上に城地の指月山が、中央に嘉永2年(1849)に拡張移転した藩校明倫館が見える。右上には、安政2年(1855)4月に開通した姥倉運河が描かれている。田畠や社寺地、屋敷地などが色分けされ、藩士の居住地も細かに記されるなど、幕末期の萩城下の様子がよくうかがえる。



其一 敷地平面図



其二 建家平面図

11 山口御屋形図 其一・其二（写）

幕末期

紙本着色

2幅 箱共

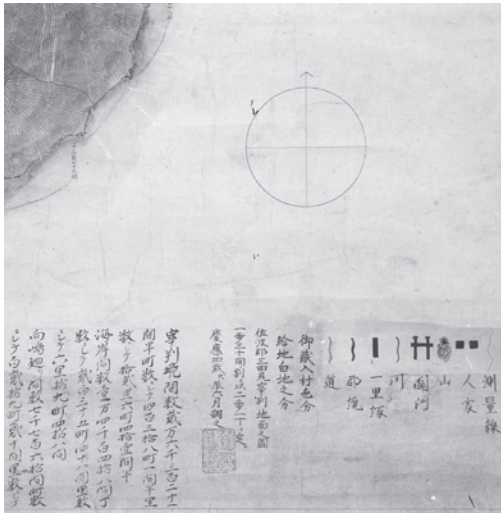
(敷地平面図)93.0×79.0／(建家平面図)79.0×102.0 540-17

慶応2年(1866)5月、長州藩の新たな政治拠点となる山口新御屋形が落成し、藩主毛利敬親が入居した。表向きは「御屋形」と称したが、実際は、背後の香山と一露山を天然の要害とし、周囲に堀と土塁を配した洋式城郭であった。

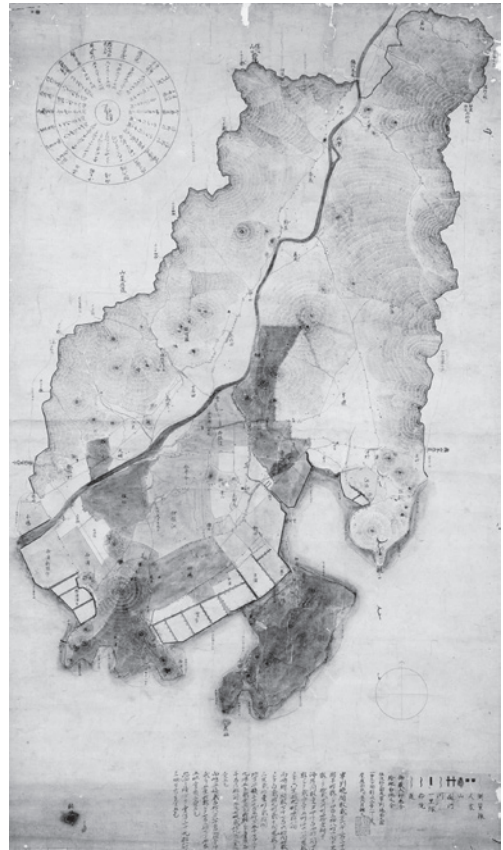
図面は、「其一 敷地平面」と「其二 建家平面」で構成される。敷地全面図は方眼入りの実測図で、建物、土塁、堀などの各種構造物の大きさを知ることができる。建物平面図には、各部屋の名称や間取り、役職の配置が記され、機能別に色分けされている。建物の左下半分が、玄関・式台・大広間・大書院などのいわゆる「表」部分。中央が台所周りで、右上半分が「裏」(奥)になっている。

本図の納箱の蓋表に、「昭和十一年十一月皇政復古七十年記念事業ニ関シ公爵毛利家ニ申出デ本図ノ寄贈ヲ受ケ装潰ス」と記されている。本図は、「山口御屋形差図」(山口県文書館蔵、毛利家文庫・絵図545・546)の控図もしくは写図とみられる。

ちなみに、維新後の山口御屋形は、山口藩庁舎・山口県庁舎として、大正5年(1916)の新庁舎建設(重要文化財「旧山口県庁舎」)まで使用された。現在も堀や土塁、石垣の一部、本門(県指定有形文化財「旧山口藩庁門」)などの遺構が残っている。



凡例部分拡大



12 佐波郡三田尻宰判地面図

細田直行

慶応4年(1868)6月

紙本着色

1幅

130.5×76.7(158.0×82.0) 540-7

ケバ図法で描かれた近代的測量地図で、山口県文書館蔵の2点(袋入絵図129・130)と同種のものである。

年記の下にある落款印から、作製者は細田直行(孫七郎)と判明する。細田は、幕末～明治初期に小郡や防府方面で測量師として活動していたとみられる人物で、「吉敷郡小郡宰判地面之図」(毛利家文庫・絵図331、山口県文書館蔵)、「山口宰判地面図」(袋入絵図142)、「小郡絵図」(袋入絵図187)、「小郡宰判全図」(林家文書、山口大学総合図書館蔵)ほか数点の作品が残っている。細田の作品については『描かれた小郡－小郡宰判絵図にみる幕末の風景－』(山口市小郡文化資料館、2015)を参照。

13 山口古図（写）

山口県立教育博物館

大正6年(1917)7月

紙本着色

1 幅

113.6×107.6(153.0×115.6) 540-5

「山口古図」は、大内氏時代における山口の状況を描いた絵図としてよく知られている。この絵図は、フランス人ビリオン神父と深い関わりを持っている。明治22年(1889)、天主教教会の牧師として山口で布教にあたっていたビリオン神父は、山口におけるザビエルの布教関係遺跡の究明に熱心に取り組んでいた。なかでも、神父が是が非でもつかみたかったのは、ザビエルが大内義隆から与えられた大道寺の所在場所であった。だが、懸命の努力にも関わらず、遺跡解明は思うように進展しなかった。ところが、数年後、神父はついに大道寺が記された一枚の絵図を発見したのである。この発見時期は、明治26年(1893)頃のことという。神父は、本図に記載された大道寺跡に記念碑の建設を発願し、大正15年(1926)10月に完成させている(サビエル記念公園、山口市金古曾町)。

この発見の経緯に関しては諸説あるようで、それらを大筋でまとめると、発見された絵図は山口の旧家安部家の旧蔵品で、県庁の図面掛に依頼して写本を作製し、それを歴史学者の近藤清石に見せたことになっているが、確かなところはわからない。また、肝心の発見された原図の、その後についてはまったく触れられておらず、現在も所在不明である。写図よりも原図が重要なことは言うまでもないことであり、歴史的な発見であれば、尚更のこと原図が大切に保管される、あるいは何らかの所在情報が伝わっていて然るべきであろう。

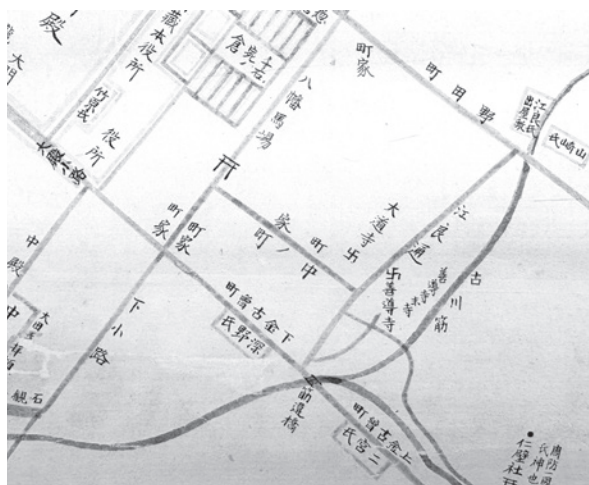
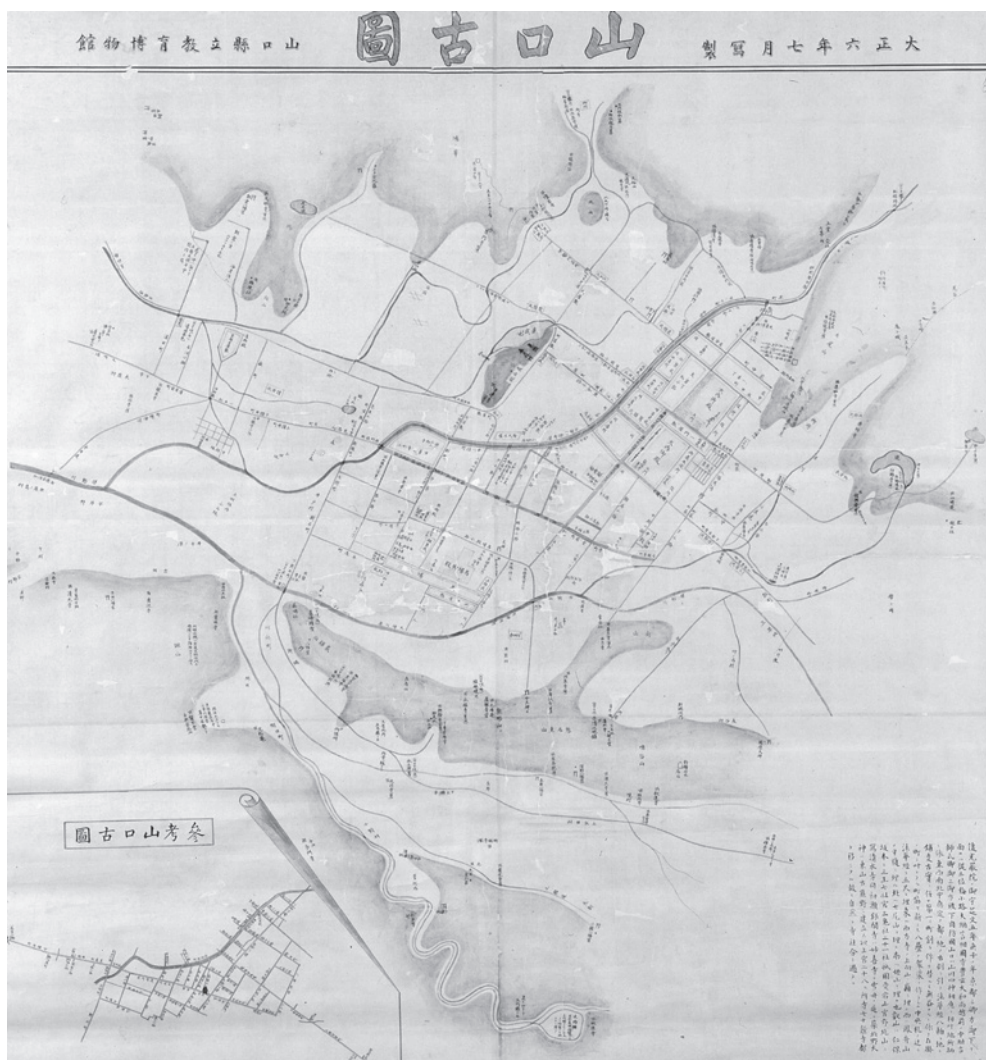
上記の経緯はともかく、このような主題図的なものが大内氏時代に作製されたとは考えにくい。また、近世以降の情報が含まれており、内容に矛盾があることを川副博氏と御菌生翁甫氏が指摘している(『山口県地方史研究』第6号・1961、『同』第7号、1972)。さらに、この絵図の存在は近藤清石も承知していたようであるが、大内氏研究の第一人者であった近藤が、この絵図に関して著作も含めて全く言及していないことが、その評価を端的に表していよう。推察の域を出ないが、江戸時代後期もしくは幕末～明治初期の山口町図を基にして、明治期に大内氏関係の史跡等を記入・加筆したものとするのが妥当と考えられる。

なお、「山口古図」は、本図のほかに山口県文書館に3点(毛利家文庫・絵図319、軸物史料218・219)が所蔵されている。本図はこのうちの軸物史料218の模写とみられる。

上記の文書館所蔵資料のうち、毛利家文庫・絵図319は識語に「明治30年12月」の年紀と「毛利家用達所山口出張所所蔵」の書き込みがあり、現存する山口古図の中で作製年が明らかなものとしては最も古い。また、軸物史料218は、明治42年(1909)3月25日付けで県立山口図書館が「購入生産」したものともみられる。軸物史料219は、大正12年(1923)9月15日付けで同館が「生産」したものである。

もう一つの肝心であるビリオン神父所蔵の「山口古図」については、長富雅二編『ザベリオと山口』(1923)に図版(部分)が掲載されているが、これも所在不明となっている。いずれにしても「山口古図」に関しては不明な点が多く、利用に際しては成立事情等を十分に踏まえておく必要がある。

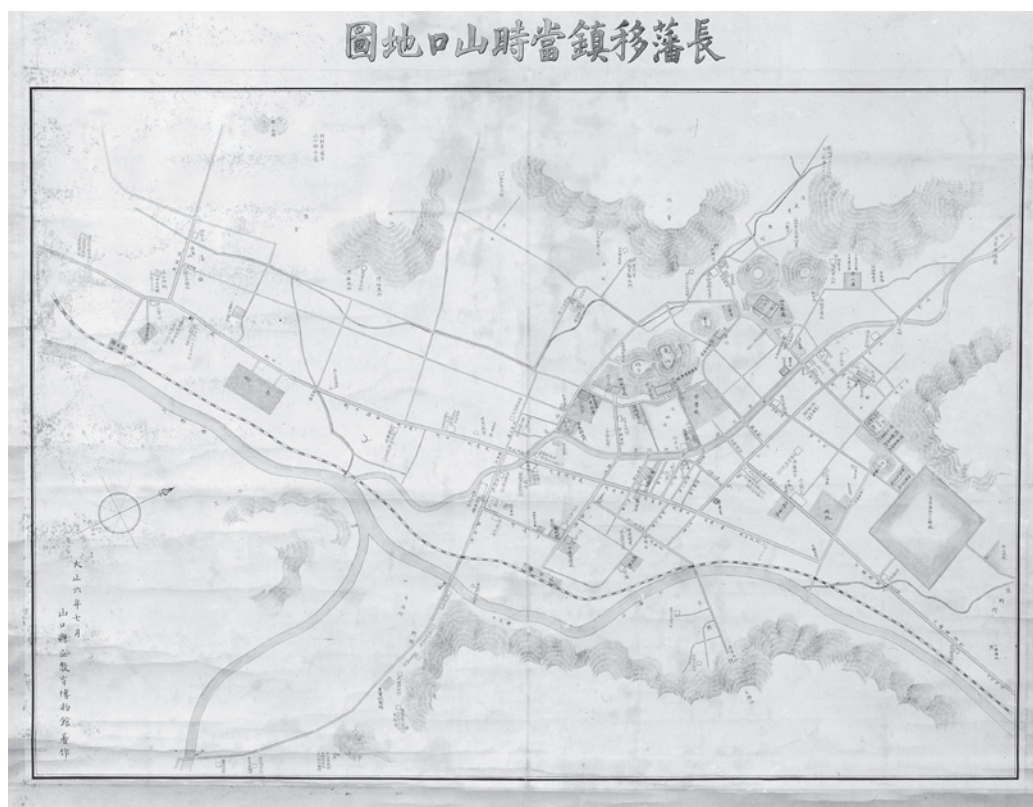
ちなみに、「山口古図」の復刻版は、『大内時代山口古図』(マツノ書店、1974)、『山口市史「史料編」大内文化』附図(山口市、2010)がある(いずれも底本は軸物史料218)。大道寺跡については、山口県埋蔵文化財調査報告第186集『平成10年度重要遺跡確認緊急調査報告書 大道寺跡』(山口県埋蔵文化財センター、1999)を参照。



大道寺部分



「山口古図」(軸物史料218、山口県文書館蔵)



14 長藩移鎮當時山口地図

山口県立教育博物館

大正6年(1917)7月

紙本着色

1幅

88.8×108.5(153.0×137.5) 540-20

亀山周辺拡大

大正6年(1917)時点の山口町図に、幕末維新期の諸施設や出来事を落とし込んだ史跡地図である。長州藩各支藩の屋敷や幕末の志士たちの居宅などの具体的な位置・範囲を確認する上で有効な資料となっている。

なお、同様の史跡地図に『皇政復古70年記念山口史蹟図』(山口市、1936)があり、これらと「幕末山口市街図」(袋入絵図178、山口県文書館蔵)を比較・照合することで幕末～明治初期の藩都山口の状況を知ることができる。